

ENSA（フランス国立スキー登山学校）教官
ジャンクードレイ氏来日

一日仏登山の息吹きの交わりー

AGSJ会員 長野岳史

ENSA?・・・どこかで聞いたことがあるような、NASAじゃあないよな。何か教えるって、どこの国の?わからないことばかりという方がほとんどかも知れない。

ENSAは、ECOLE（学校）NATIONALE（国立の）SKI ET ALP INISME（スキー、アルピニズム）の略である。という、そこへ行けば、登山やスキーを教われるのかということ、全くそうではない。

その組織としての機能は、プロフェッショナルのガイドの教育を重要な柱とするものだ。ガイドというと、日本では未だに認識度の低い職業だが、かの地では、その資格を得るためには、教養、知識、判断力、技術、体力等、最高のものを身に付けた人間が試験をクリアできるのだ。よって、ガイドはヨーロッパでは憧れの職業のひとつということができるだろう。「グリンデルワルドの子供たちは、必ずガイドごっこをして遊ぶ。」・・・新田次郎氏の「アルプスの谷 アルプスの村」にはこんな表現が出てくる。

AGSJ（日本アルパインガイド協会）は、毎年シャモニにガイドを派遣し研修を行い、ENSAとの技術交流を果たしてきた。幸運にも髙田聡氏と共に私も今年の研修に参加することができた。一方、現地でガイドになるためには、きびしい研修と試験とがある。

試験の過程等は、日本人初のヨーロッパ正ガイドである斎藤和英氏や、アスピランガイドの江本悠滋氏によりたびたび紹介されているでここでは割愛するが、その職業としてのイメージを例えて言うならさしづめ「宇宙飛行士」といったところか。

現地での研修は、始まった瞬間から「教官について行くのをあきらめるか、あと何分ついて行けるかに挑戦するか」の究極の選択だ。もたついてはそれ自体がミスティブになる。・・・ともかく、そうやって2週間の研修が行われるわけだ。

今回来日されたジャンクードレイ教官は、長野県松本市の主催である「2001 ワールド・マウンテン・リゾート・アンド・ゲートウェイシティーズ・カンファレンス」にフランス代表として出席されたのちに、数日間を多忙の中確保され、かねてからの夢であった日本での登山行を果たされた。1969年から30年以上にわたり、ENSAでの教官を務めてこられ、ヤルン・カンの無酸素・セミアルパインスタイル登頂を含む30回を超えるヒマラヤ行、1000ルートを超えるヨーロッパアルプスでのガイド、登山歴・・・まさに「フランス登山界の巨星」。

そう紹介すると、鬼のように怖い人を思い浮かべてしまうが、実際の教官は、たいへん優しく、かつパワフルであり、親日的である。

谷川岳の印象を「すばらしい山だ。自然が200、300年前のままでキープされている。」と語られ、よく外国の登山家が言及される「一の倉の岩壁の脆さ・危険」はむしろク

ードレイ教官には心地よいものであったようだ。こう書くと、不思議と親しみを覚えてしまう日本のクライマーも多いのではないのでしょうか。そして、教官の暖かいお人柄は、小川山で教官と岩場で会話できたクライマーの方々には理解されたことと思う。「自由、平等、博愛」そのままの教官に、遭遇した人々は皆、幸せな気持ちになってしまうのであった。

さて、クードレイ教官は、10月10日（水）に、都内で近藤等教授をはじめとする関係者との会食の機会を持たれ、翌日には谷川岳へと向かわれた。今回は2回目の来日である。しかし前回は講演会と会議出席の多忙なスケジュールで、夢であった日本での登山は果たせなかった。もう教官の日本の山への思いは最高潮である。しかもホストは、鈴木昇己、遠藤晴行、勝野惇司という谷川岳に精通したプロ登山家。ついに教官の夢は実現した。（長野、記）

10月11日

ホテルサンルート東京、約束の10時少し前に迎えにいくとプロフェッサー・クドレイはすでに一階ロビーに下りてきていた。昨日の会食時とは違った服装で見るとからにENSAの教官である。

新宿を私の車で出発、すぐに首都高速に乗るがなかなか関越道には入らない。

「ここはどこだ？」と聞いてくるが、そのたびに「ここはまだ東京です。」と答える。

ようやく関越道にはいり3000ccエンジンをフル回転させ谷川に向う。

ともかく明日登る予定の一の倉沢を見せておこうと思う。過去にはこの岩壁を見ただけで「こんなところは登るべきところではない！」と言った方もいるのだから。

もし教官が同じ事を言ったら、明日は天神平から谷川岳の紅葉狩りしかないなあ、と思う。

教官との山行コースの選択には迷いに迷った。富士山か穂高か剣か三つ峠のクライミングかとあれこれ考えるが、教官を満足させられそうな雪のルートはこの時期の日本には無い。仕方なく、日本の代表的クライミングエリアである谷川岳と小川山に決定してしまった。

安易過ぎたか？

午後1時、一の倉沢に着くと観光客の多さに圧倒される。

「勝野！レッツゴー！」と教官。「ノー！今日は登らないよ！、明日登ろう。」と私。

「OK！でもそのへんまで行ってみよう！」と言うので一の倉沢へ入り込む。

もちろん、ロープなし、教官はスニーカー、私はステルスサンダル。ヒョングリの滝真下まで登り明日登るルートを説明する。

「グッド！グッドロック！」との意外な言葉であった。

帰路、谷川岳登山指導センターに寄り過去から現在までの事故を聞くと、さすがに教官も言葉に詰まって目を白黒、「なぜだ！」

時間があるので天神平まで登って見る、ロープウェイから見る紅葉には感嘆していた。

そう、シャモニの紅葉は黄色にはなっても赤が無いから日本の紅葉の鮮やかさは際立って

いたのだろう。

ロープウェイ、リフトと乗り継いで、天神峠に立つと谷川岳頂上付近はガスの中だった。

しかしその下の紅葉は見慣れた私にとっても素晴らしい景色だった。

「勝野はリフトで降りろ！俺は走って降りるから！」と教官が言い出した、ENSAのスキー教官でもある彼はスキーコースが見たいとのことだった。

今夜の宿泊は土合山の家。明日のメンバー鈴木ガイド、遠藤ガイドが到着し歓談。

それぞれ自著の山岳書を進呈していた。

10月12日

6：00スタートの予定であったから5：30に飛び起き、教官の行動食を買いに水上のコンビニまで車を走らせる。今日の天候が心配だったため、晴れたら買いに行こうと横着を決めていた私だったが窓から見える青空に慌てて飛び出した。

チーズ、サラダのパック、ソーセージ、パン、リンゴ、水が彼の行動食である。ちなみに我々日本人は土合山の家で作ってもらったおにぎりである。

6：37一の倉沢を出発。ヒョングリを高巻き中央稜テールリッジを登る、クライアントも同行した遠藤ガイドを置き去りにしてどんどん登る。すごいスピードであった。保科ガイドとクライアントが先行しているのを教官は目撃していたのだった。追いついて、保科ガイドと再会を歡ぶ教官。

8：30南稜のクライミングをスタート。はじめは教官にリードを楽しんで貰おうかとも話したがやっぱりお客様はフォローしていただくことにする。

鈴木ガイドがリードし、確保は教官にお願いして私は写真撮影に専念することにする。

9：40南稜の登攀終了、丁度1時間10分の登攀を楽しんだ。同ルートを下降し、10：40にはスタートした南稜テラスに戻った。南稜フランケを登攀した遠藤ガイドもすでに戻っていてテールリッジと一緒に下る。

ヒョングリの高巻きはせずに懸垂下降で通過する。12：00一の倉沢出合に戻る。

天候に恵まれ、また紅葉真っ盛りの一の倉沢は、登攀日和となったがシャモニ針峰群での登攀とは全く違った印象を残したものとおもう。いつまでも双眼鏡で一の倉沢を眺める教官の姿が私には印象に残った。

谷川温泉で露天風呂を楽しんで、明日の目的地小川山にむかう。明日からは長野ガイドとフリークライミングを楽しむ予定になっている。(勝野、記)

さて、谷川岳の登攀を楽しまれた翌日の13日には、小川山へ移動。廻り目平周辺の岩登りを、ガイド協会の登山学校と帯同して楽しまれた。ガマスラブでは、畠田講師の指導を視察。ご自身もスラブのルートをリードされた。その後、八幡沢へ。「春の戻り雪」を勝野ガイドと私と3人で30分ほどで登攀。終了点で紅葉を眺められた後に下降して、下山。小川山の花崗岩はフリクションがよく、教官は気分よく登攀されたようであった。

山荘に戻った後、夕食までの時間を利用して、教官のお話を伺う時間を持つ幸運に恵まれた。日本の山の印象を中心に語って下さった。

「クードレイ教官の談話」

こんにちは。日本の秋の山々は本当に素晴らしいですね。この機会を得たことに感謝すると共に、この場で日本の山の印象を中心にお話します。

私にとり日本は今回が2回目です。初回は12年前であり、神崎氏の招きで講演、スライド上映会を行いました。それらは東京、京都で開催されました。一方で、ここ数年、多くの日本人ガイドがENSAを訪れ、親交を結ぶことができた。4年前より鈴木昇己、勝野惇司、松島利夫、遠藤晴行、保科雅則、斎藤和英、等の諸氏にガイド技術を教える機会を得ました。そして、アスピランガイドの江本悠滋氏も。今年はENSAに2名。嵐田聡氏、そして君でしたね。

とにかく（日本の山には）たいへん興味があり、日本の山で多くのことを発見したかった。今回、まず「2001年、世界岳都市会議」に長野県松本市の招聘で出席しました。

そしてまた同様に、いつか実現したかった夢、自分の山登りのための滞在を決断したことを、私は今楽しんでいます。なぜなら、AGS-Jからのホストの方々はたいへん暖かく、また（次から次へと様々な場所を案内していただき）私は待たされるということがなかったからです。私は、勝野氏、松島氏、鈴木氏、遠藤氏に、同様に協会の全ての会員の方々に感謝します。

シャモニでのENSA研修でお会いできた方々と再会でき、たいへんうれしく思います。ヨーロッパアルプスで、または日本でまたお会いできますことを楽しみにしています。

それでは、山について、私の第一印象は、秋の山の色の美しさでした。ついで、2000メートル前後の広大な、様々な山がたいへん多いということです。山々には、登山、登攀、スキー、そして山スキーと、多くの可能性がありました。

最初に訪れた上高地では、登りませんでした。冬季の写真を見たり、また冬の上高地を想像したりするごとに、たいへん引き付けられるものがありました。

谷川岳は、大変ワイルドなところでした。そして自然の全てがオリジナルに残されている。（教官は、先の岳都市会議で、ツーリズムと自然保護のバランスという命題に取り組まれて来られた。：筆者注）

山々はダメージを受けていない。自然を愛する人々にとり、日本の山はたいへん素晴らしいと思います。

日本人のガイドやクライマーにはとても親切に接して頂いて、感謝しています。クライミングはもちろん楽しく、ホストの方々も友好的です。

ルートによっては危険で、充分かつ多くの登山の経験が要求されます。様々な難易度のルートがありました。

そして、私にはなぜ日本人のクライマーがヨーロッパアルプスへやってきて多くのことを楽しむことができるのかを理解できました。ヨーロッパの人は、日本という国は全部が平野だと思っているのです（笑）。日本の山々は、登山やスキーの技術を身につけるのにとても有効です。夏、冬を通じての山での活動は、たいへんよい経験となり、アルプス、ヒマラヤの登山にも、効果的なものです。

先程お話伺った、今回訪れた谷川岳の烏帽子奥壁大氷柱は、神話(myth)です。ヨーロッパ、シャモニ周辺だと、グランドジョラス北壁がそれにあたるでしょう。日本人クライマーの魂の証明として最も典型となるもので、ビッグ・レコードであり、手柄(exploit)です。グッドで、ストロングな魂が何処まで可能性を追求できるかという意味で。

ともあれ、次回はぜひとも冬に日本を訪れたい。その時には、冬季の登攀や、スキーを存分に楽しみたいと思います。

インタビューを通じて、教官は終始にこやかに日本の印象を語って下さった。特に日本における特筆すべき記録の話になると、眼光の鋭さと輝きが増し、格別の興味を示されたのが強く印象に残った。次回の訪日の折には、ENSA教育チームトップのスキー技術と、30回にも及ぶヒマラヤ、延べ1000ルートを超えるアルプスのガイド登攀を経験した教官が冬壁に登られる姿を、この目で見ることが出来るかもしれない。そう思うだけで胸が熱くなるのであった。

真に親日家で、皆への感謝の言葉がいつも添えられていた教官であったことは、言うまでもない。日本の登山界、ガイド界は、ここに大きな指導・助言者を得たことにより精神的支柱を与えられた。

最後に、雪山の初心者の方の事故が多発する事に関しての、教官のアドバイスを添えて、筆を置くことにします。(長野、記)

「1歩1歩をexactly（正確）に。」

ENSA教官 Jean-COUDRAY氏の略歴紹介

1942年7月5日生まれ

◎ プロとしての履歴

- ・高山ガイド・・・1965年より
- ・エキスパート・スキー部門教授

-
- ・スキー・パトロール・レスキューインストラクター
 - ・ENSA教官・・・1969年より
 - ・UIAA遠征登山委員会代表
 - ・インド登山財団テクニカルアドバイザー・・・1973年、及び1976年
 - ・ネパール登山協会テクニカルアドバイザー・・・1982年より
 - ・ブルガリアガイド組織テクニカルアドバイザー

◎ 登山活動

- ・ アルプスでの殆どの大ルート・・・特に教官は、エギーユ・ヴェルトがお好きで、7ルートから延べ30回も登られている。
- ・ アルプスにおける数度の初登攀
- ・ アルプスでの数度のハード・レスキュー
- ・ 全てのヨーロッパ・アルプスの山々について大変に精通す
- ・ 1972年 プモリ南ピラー初登
- ・ 1975年 ナンダ・デビ 主峰登頂
- ・ 1978年 1980年 ダウラギリ南西ピラー部分を完登
- ・ 1979年 K2 南南西稜 8400mまで
- ・ 1984年 ヤルン・カン 無酸素、6人チームで登頂
- ・ 1993年 マカルー
- ・ その他多くのトレッキング・ピークのトレッキング
- ・ 各地で、山やクライミングに関する講演を経験。

◎ 製作, 及び出版

- ・ スキー登山に関する映画3本を製作
- ・ 1980年のダウラギリ遠征に関する映画1本を製作
- ・ フランスで出版の登山雑誌への寄稿
- ・ 登山活動に関する2冊の共著

ジョン・クードレイ教官来日報告

報告者：勝野惇司

2001年10月10日

ホテルサンルート東京にて懇親会

来賓：ジョン・クードレイ教官、近藤等先生

参加者：松島利夫、鈴木昇己、遠藤晴行、青木昭司、木本 哲、畠田 聡、勝野惇司



近藤先生、クドレイ教官



全員で記念撮影（ホテルサンルート東京2F）

11日、早朝に勝野が自家用車にてホテルから谷川岳に向けて出発する。
一の倉沢出合からヒョングリ滝の上まで登って一の倉沢を視察する。



大滝の下をフリーで登る。



ヒョングリの下にて

谷川岳指導センター、天神平スキー場と回り、今夜の宿泊先の土合山の家に集合する。
夕刻、鈴木ガイド、遠藤ガイドが集まる。



指導センターにて



天神峠ピークにて



土合山の家にて

左の女性は、遠藤ガイドのクライアント。

12日、一の倉沢南稜ルートを鈴木ガイドと勝野で案内する。遠藤ガイドはクライアントが居るため別行動となる。



猛烈なスピードで登ったため、勝野、鈴木は置いていかれる。
衝立の下で偶然に保科ガイドと出会ったようである。

南稜登攀



8 : 3 0 取り付き、鈴木ガイドリード



チムニーを登るクドレイ教官



南稜上部の鈴木ガイドとクドレイ



最後のフェース



1時間10分で登攀終了。

下山後に鈴木ガイドと別れ、勝野の車で小川山に向かう。宿泊は岩根山荘。

13日、登山学校の小川山講習に合同する。



登山学校生に混じってガマスラブでクライミングする。

場所を移して、長野ガイドが対応する。



長野ガイドと春の戻り雪



帰りに記念撮影。

夜は、登山学校生とクドレイ教官、AGS Jガイドの懇親会を行う。通訳は江本君に御願ひする。

14日、明日の離日を考慮して、登山学校より一足先に帰京する。



朝食後に挨拶するクドレイ教官です。

夜、クドレイ教官を囲んで、近藤等先生、近藤隆治顧問、松島夫妻、勝野で渋谷にて「しゃぶしゃぶ」の最後の晚餐。



15日、離日（担当：緒方歌子）